

〈彙報〉

昭和六十三年国文学科活動報告

芸能鑑賞

日時 昭和六十三年六月三日(金)

午前十一時から(二年生)

午後二時から(一年生)

場所 大阪厚生年金会館

参加者 一年生二〇八名、二年生一八七名、専任教員六名、

助手二名の計四〇三名。

演目 歌舞伎「芦屋道満大内鑑」

一、歌舞伎のみかた

二、芦屋道満大内鑑 一幕二場

安部保名内機屋の場

同 奥座敷の場

女房葛の葉

葛の葉姫

安部保名

同 童子

信田庄司

庄司妻柵

片岡秀太郎

片岡秀太郎

嵐徳三郎

佐保清未

尾上寿鴻

實川延寿

同 駕の者 嵐 和也
片岡和成

昭和六十三年度の芸能鑑賞は、第十三回歌舞伎鑑賞教室の「芦屋道満大内鑑」を観た。会場は三階席まで入れると二四〇〇席もある大阪厚生年金会館で、歌舞伎鑑賞には不適當な場所であった。しかも申込みが遅れたため、三階席での観劇であったので、俳優や舞台装置を見下ろすかつこうになり、感動は半減した。

さて、当日は、高校生を中心としてほぼ満席に近い状態で、開幕しても一向に静まらなかった。おそれていたことが起こった。

歌舞伎の見方について説明され始めた片岡秀太郎氏が、突然生徒達を叱責したのである。こんなに騒がしいのは初めてである、と。

筆者は、講義中私語する学生を叱った後は決してうまく行かないことを何度も経験しているので、説明の後で主役を演じる片岡氏には怒ってほしくなかったのである。

芝居の鑑賞態度についての注意は、開幕後すぐに主催者が行うというような工夫があってもよかった。

観客数が多すぎることや上演時間が短すぎる(正味一時間)こと、又、観劇中に大雨洪水警報が発令されるなど、色々と問題の多い鑑賞教室であった。

なら・シルクロード博見学

集中講義

昭和六十三年度の文学遺跡めぐりは、「民族の英知とロマ
ン」をメインテーマとして奈良で開催されているシルクロ
ード博覧会見学として実施した。

会期も終りに近づいた十月六日(木)の奈良は、あいにく雨の
日になったが、学生諸君の興味や関心が強かったからか欠席
者もわずかであった。おりからの雨にけむる興福寺五重塔を
仰ぐのもなつかしく、塔を背景に記念写真を撮った後、各自
自由に見学してまわることにした。会場は四か所に分かれて
いたが、テーマ館やシルクロードなら館のある登大路会場に
関心を持った学生が多く、得るところも多かったようだ。

後日提出させたレポートには日本の文学を学ぶに欠かせな
い古代中国の歴史に触れることができて感動したとの印象
や、書物や映画で知った「敦煌」の遺跡を実感でき感動した
との感想が記されていた。

こうした行事の見学は、幸い催しがあったので実行に移せ
たものであるが、恒例の文学遺跡めぐりの形で文学ゆかりの
土地を歩くのとひと味ちがった意義深いものであったと思わ
れる。

日時 昭和六十三年十一月八日(火)

第三時限から第四時限まで

対象 国文学科一、二年全員

場所 南港学舎講堂

講師 京都府立大学元教授 寿岳章子先生(国語学)

講義題目

「あるシヨートスカート物語」

―戦後の中の一女性の生涯―

『おあん物語』を資料として

南港学舎に移転して以来、はじめての国文学科集中講義が
行われた。

講義内容は次のようなものであった。

『おあん物語』は、言文二途の時代唯一の話し言葉で書
かれている。しかも版を重ね、よく読まれていた本であ
る。

主人公おあんは戦国時代に生きた女性で、すさまじい戦
争体験を淡々と語っている。大変よく子供の時のことを
覚えていられるにもかかわらず、戦争がつかいとかが平和が
いいなど主観的なことは一言もいっていない。ただ食物、
着物に異常な執着を示している。十三の時、作った帷子
を十七まで着ていたので脛が出てはすかしかった。「せ

めてすねのかくれる程の帷子袴つほしやおもふた」ー
 ロングドレスがほしいー。と嘆くのである。こうした女
 性像は、おそらく無数の日本の女の生き方に通ずるもの
 であつたと思う。長い間志のない領域に女性史は形成さ
 れて生きてきたが、これからの若い女性には、それなりの
 志をもたなくてはいけない。言葉というものは、人がい
 かに生きるのかということと関係する。言葉の世界が何
 を開拓するかということ、いろんな時代のものを通じ
 て考えていただきたい。

次々に広がる寿岳先生の発想の世界にしばし時を忘れ引き
 摺り込まれた。学生たちは普段の授業とは違つた雰囲気の中
 で、自分自身を振り返り将来について考えたようである。

今回の集中講義は、『おあん物語』を通してこれからの女の
 生き方について考えさせられる興味深い話であつた。

昭和六十三年 国文学科講義題目

文学概論

国文学概論

国文学史Ⅰ

国文学史Ⅱ

国文学講読

萬葉集

枕冊子

平家物語

蕪村の俳諧

近代小説―逍遙から太宰まで―

近代小説―逍遙から太宰まで―

三島由紀夫

国文学演習

源氏物語

源氏物語

新古今集

新古今集

小	鈴	横	中	池	土	鶴	福	北	池	鈴	安	上	森	田	柿	榎	鈴	福
林	木	野	野	川	井	崎	本	谷	田	木	藤	田	崎	中	谷	野	木	本
豊	道	廣	惠	敬	順	裕	良	幸	幸	徳	武	博	光	敏	雄	廣	徳	良
		造	海	司	一	二	二	冊	冊	男	彦	子	子	生	三	造	男	二